10/17 後期第２回地球科学輻合ゼミナールレポート

「あほなことせえ　~旧教養学の哲学~」

講演者：酒井 敏 (京都大学人間・環境学研究科 相関環境学専攻)
報告者：内野 宏俊 (理学研究科 地球物理学教室 M1)

なぜか「アホなことをしろ」と言われた。「いやなに、自分だっていつもアホなことはしている」と思った。それは思い違いだった。自分は単にアホだった。アホな自分が行動しているだけだった。という冗談はさておき、今回の酒井先生の講演の要旨をまとめていこうと思う。

◎アホなことをするとはどういうことか

関西圏では、よく「お前はアホやな〜」と言われることがある。しかしそれは殆どの場合褒め言葉である。その昔、酒井先生が京大の教授陣に「あほなことせえ」と言われたということは、その意味と同じことであろう。すなわち、「普通の人が考えもしないことを考える、やりもしないことを行動する、行きもしないところに行く」ということである。勿論、他人に迷惑をかけないようにである。

◎アホなことをするためにはどうするか

「なんとかする」のが極意。とりあえず生きていくためのお金だけは用意しとかなければならない。京大はそういう環境には適しているだろう。生きていければ、後は自由に勉強でもなんでもできる。酒井先生曰く、最近はその環境が崩れてきているらしい。話を聞く限り理学部はまだマシな方なのだろう。

◎アホなことが世界を救う

理由は単純明快、「この世はカオスだから」である。つまり、この世は何が起こるかわからない。普通の人間が世界を回すように組み立てたシステムだけでは、不測の事態に対応できない。そこで、「アホなこと」をしている人間の登場である。不測の事態には不測の思考をしている人間が必要なのである。人類を不測の事態から救うのは「アホなこと」をしている人間なので、そういう人がしっかり人権を得ているような社会が強い。実際、企業レベル・国家レベルでもそうである。自分にも人権がほしい。

◎アホなことをしている人間を守るために

人間の集団を考えると、平均的な人間が最も多くそこから外れるにつれて人数が減っていくいわゆるGaussianのような分布であるだろう。その集団の平均から大きく外れた、アホなことをする人間は必ず現れるものである。おそらくそういう人間は、教育制度が多少変わろうとも存在し続ける。問題は、平均的なところと、アウトローをつなげる付近の人間が、教育によって平均的なところに落ち着かされてしまうことである。アホなことをしている人間の重要性を伝える橋渡し役の人間が減るのが問題である。

◎京大生はアホなことをしよう

世界をきちんと回す役目は、他の人に任せましょう。京大生はアホなことをして世界を救いましょう。実際に役に立つかは運次第。

感想：酒井先生の講演を聴く中で、「人間時にはバカになる必要がある」というのを常々口にしていた小学校の担任を思い出した。たしかにそのとおりで、色々なことに対応するにはあほなことが必要になる場面も出てくるし、なによりアホなことするのは楽しい。企業でも、ちゃんと売れる商品で利益を上げつつ、その利益をつかって研究をしっかり行うところが更に伸びてくるというのが通説なはず。結局「アホなこと」とはそういうところに対応するんだと思う。とりあえず自分は常にアホ状態なのを何とかしたい。